



史傳

大題小題二

米

溪

サーモビレーの戦

軍さ物語りは、婦人の耳に疎きも、男の子の最も喜ぶ所、賤が獄の七本槍は、お祖母さんの御伽話に馴れたるべく、補正成の話は、繪草紙の説明に聞き飽きもしたらん、さればとて之は耳新らしき材料とははあらざるも、稍目先きの變れると、其の事の壯烈とは、聊か又御伽話の一助にもならんか、夫にても男の子にとのみのものにもあらざるべしと思ひて

筆採りぬ。

歲月悠々三千載、桑滄の變、今は昔しの様なきも、試みに、古代希臘の地圖を取て一瞥せよ、エイジャン海上、希臘の東海に瀕して、ユーボアなる一島を見ん、島と陸とによりて狹める地峽は、乃ちマランにして、峽頭の一灣は所謂マリスなり、ユータの嶮山突として、餘勢海に逼り、森林鬱として、雲を藏し、霧を含み、山骨露出する處、岩角兀として、崔嵬、仰ぐべく、攀つべからず、稱すべく、踏むべからず、斷崖忽如として脈を斂むる下、僅かに一條の道、車を遣るべく、之れより海に至るもの、約一英里、沼澤遙に連なりて、泥濘氣蒸す。天晴明に當りては、潮頭の白沫紺碧の上に浮び、斷崖天を摩する下、春暉西澤を互り雲霧跡を斂めて、四邊の噴泉、温かにして、痾を

養ふべきも、林樹雲を吐て、白霧沼を蔽ひ、風山岳を動かして、萬類怒號するに當りては、濤は戰鼓を鼓して、山伯舞を奏し、天地晦冥、風物濛々之れ往昔のサーモビレーなり。

往古セツサリア人、フラシヤ人と此の地を狭み住して、互に争鬪するや。彼の徑路に當りて、牆壁を築き、以て其の侵入を防きしが、フラシヤ人山を遶りて海に注ぐ、急流の川床に従ひ、絶險の間に彼の沼澤に徑せず、直ちに敵地に通すべき、一條の山路あることを發見してより、牆壁遂に効を奏せず、類敗理せざるに至りしが、之れ北方希臘より、南に入る關門にして、誠に天與の形勝、一夫の力、以て千軍を支ふべきの地なり。而してスバルタ王レヲニダス、三百の雄兵を提げて、波斯の大軍を迎へたるも、實に此の地なり。

蓋し此の戦は、獨り人事上に根するのみならず又宗教上よりも來れり、乃ち波斯人は拜火教徒にして、獨り太陽及火を崇拜し、希臘人の、偶像を禮拜するを嫌忌せり。

是の時に當り、波期王領する所、東既に印度高加索より、イージャンに至り、西裏海より紅海の濱に及び、漸次、地中海東岸の小自由國を蠶食せり。希臘人彼を呼ひて、東洋の首領と云ふ。遂に希臘を征伐せんと欲し、使を四方に派して、其の水土を献し、以て附庸の意を表せしむ、遠近、風を望んで、歸するもの甚だ多し。而して志未だ酬ゆる所なく、ブライアス空しく、憾を飲で地下に入るや、ザーキジス、父の志を繼ぎ、遂に其の欲する所をなさんと期し、大軍既に集る、二百五十万と稱す、進て歐羅巴に渡らんとし、ヘルレ

スボンドの海峡に長さ一哩なる二條の船梁を架し、全軍渡り終る迄、實に七晝夜を費しぬ。而して、別に、一大艦隊は、北の方ヘルレスボンドに航し、夫より西に轉じ、海濱を進みて、陸軍と連絡を保ち、希臘の北部を蹂躪して、アツチカに向ひ、洪水の如き勢を以て進行せり、聳爾たる小邦、克く之を支ふるを得べきか。

東洋專制の洪濤、澎湃として、天を浸し、山を覆ひ、泰西幼穉の文明、爲に其の光明を滅せんとす。危い哉。然と雖とも、ヘルラス全土、豈一の勇邦なからんや。アゼンス、スバルタの二國、憤然、起つて之に抗し、聯合して防禦に當らんとす。是に於てか、附近の小邦、亦此の聯合に加監するもの多し。

希臘各洲の委員、即ちコリンス海峡に會して、

防禦の策を議せり。時にサーキジス、營をサージスに構へ、軍威を耀かし、其の海軍は、イジャン海濱を周りて航し、陸軍はヘルレスボンドを横過し、希臘北方の諸洲を席捲して、南下の勢正に急遽の如くならんとす。若し夫れ、危を轉じて其の難を支ふるは、唯一策あり、天然の形勢を占め、隘路を塞きて、大軍一時に通過すべからざるに乘じ、數人の接戦を以て成敗を決するが如き地點を防禦するに在り。是の時に當りては、勝敗の決、勢にわらず、心に在り、數に在らず、志に在り。以て守るべく、以て戦ふべし。

これ等の峽路の第一のものは、右をテムブと云ふ一隊は其を固守せんが爲めに送られしと雖とも、之を守る、功少くして、困難多しとなし、遂に之を捨てぬ。第二の要路は即ちサーモビレーなり。

而して、地峽に於て、議を凝せる評議員等は、未だ別に、山徑あつて存するを知らず。獨り此の海濱の徑路を固守すれば、敵の總軍、到底、南方希臘人の臥榻に、其の駟聲だも窺ふ能はざるものと信せるなり。

是に於てか、其の戰艦は、ユーボアに沿ふて、防禦線を張り、以て海峽に達し、及び、徑路を辿りて上陸する波斯人を防ぎ、其の一隊は、ホツトゲーツ、乃ち（温泉あるより得たる暑き門の稱ある）サーモビレーを防守せしめぬ。兵僅かに四千皆、各都府より派遣せる所にして、其の總督は、近來新に、スバルター王の一となりし、レヲニダスなり。

スバルター人、由來勇武を以て稱せられ、壯丁は幼より、軍事的教練の下に、身心を鍛ふことなれ

ば、其の剛勇四境に冠として、士は皆耻を重んじ死を輕んじ、兒童走卒、亦自から武士的態度を具ふ。而して、レヲニダスの選ばれて、此の征伐の途に上るや、自から必死を期せり。謂へらく、一身死して、スバルタ以て其の國難を免かる、を得んと。蓋し、此の役、戰をデルファイの殿堂に卜して、ハーキユルス種の王の一人死を決して、スバルタの難免かれん、との織言を得、之を信ぜればなり。

是に於て、レヲニダス、令を下して、決死の士を撰ぶ、敢て剛氣勇猛のものゝみにあらず。曰く繼嗣なきものは去れと、得る所、部率三百、縱令一人の生還するものなきも、スバルター人の血は、以て長へに、其の宗廟を際らんなり。

精兵三百、各自僕隸數人を携へて伍をなすを以

て、其の數自から増加するも、軍容肅として、又
 侵すべからず。發するに臨みて、各、禮を具へて
 親ら葬らるゝの式をなす。謂へらく、不幸虜とな
 りて、敵の軍門に、虐殺せられんか、魂魄宙宇に
 彷徨ふて、歸するに所なけんとず。士苟も、禮を
 以て葬られずんば、孰れか又、天の樂園に、神の
 光明を仰ぐを得んと。

悽惋の氣、國內に充ち満ちて、慘憺たる光景、
 天日暗からんとするも、以てレヲニダスの魄を侵
 すに足らず。以て其の部兵の氣を奪ふに足らず。
 嗚呼又烈ならずや。

況んや、彼のレヲニダスの妻の如きに於てをや
 國滅びんとして、四境悲風滿つ、起つて、此の難
 を濟するものなくんば、蒼生を如何んせん。是の
 時に當りて、此の夫あるを知る、何爲ぞ、紅閨夢

裡の涙にむせびて、其の前途を沮止するが如く怯
 ならんや。請ふ、其の未だ年若く、少女の群に在
 りし時の事を聞け。

波斯玉、書を送りて、彼の父に降伏を勧め、説
 くに威福を以てするや、父の意、甚だ決するに憚
 かる、而して、實は禍心を包藏して、之を誘致せ
 んとせしなり。是の時に當りて、決然、辭を挾み
 て、其の父を危難の地より救ひしは、此の少女な
 り。

當時、スバルタの婦人等、其の良人の戰に臨む
 や、訣別に際し、相告げて曰く、請ふ、楯を手に
 して歸るを得ずんば、之に乗じて歸れと。

嗚呼、之れ涙なきか、眞に涙なき乎、否、唯だ
 離別の間に滴かさるのみ。スバルタの精神教育は
 遂に、婦人をして、其の遠征の良人に嘘するに此

の言葉、を以てせしめ、男子をして、其の戦に臨むに、彼の決心を以てせしむ。

記せよ、楯を鼓して、凱歌を奏する能はずんば楯に乗る死尸となりて還れとは、其の最愛の、妻の唇より漏るゝ詞なることを。

耻あるもの、誰れか奮はざらんや。其の情や、誠に、悲愴を極むと雖ども、其の事や、實に、烈日秋霜の如く、千古に亘りて、人の肺肝に徹するものあるを覺ふ。

嗚呼、豈涙なからんや。凜乎たる精神は、遂に之を濟ぐを容さざるなり。(未完)

織田信行の侍女勝子

布士 迺 舍

勝子の質性

勝子！はてな、私のお友達にも

同じ名の人があるが……。織田信行の侍女！ 織

田信行といふ人は、皆さんも御存じの信長といふ豪將の弟で、尾張の岩倉城といふお城に居つた人にならがない、信行や信長には當時侍女も多数居つたでせうに、その中でひとり三百五十余年を経て今の世に残つて、皆さんのお手本とされて居るのは、何か面白い事跡があつたのであらうと、種々調べて見ると、成る程あるは、それは悲しい事や心持ちのいゝ事があります。親父さんや阿母さんの名は傳はらず、自分の姓もわからない程の貧しい農家に生れ、朝夕田畑の泥に穢れた中にそだつた女子でありながら、その心の綺麗な事つたら、お化粧でごまかすありあはせのお嬢さんとは比べ物にならない。

又その力のあつた事をいへば、梅が谷や大砲ど